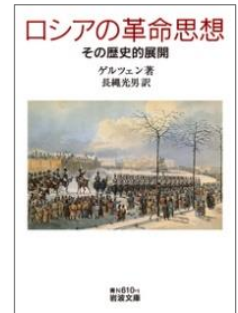


ロシアの革命思想 ～その歴史的展開～

ゲルツェン(著) 長縄光男(訳) 岩波文庫 2024.3



名著、ゲルツェンの『ロシアの革命思想～その歴史的展開』が岩波文庫からこの3月に刊行された。ロシアの文化史、文学史、思想史に関する先駆的、古典的名著として評価が高い。1851年に書かれ、本邦初訳が同じ岩波から1世紀後の1950年に出版され(『ロシアにおける革命思想の発達について』金子幸彦訳)改訳版14刷まで版を重ねたが、その後途絶えていた。その情熱渴望が込められた新訳復刊である。

良書はいつも予言を孕む

訳者長縄光男は掉尾の卓越の解説の中でこう語る。「ゲルツェンの評価の数々は、今日に至るも色褪せていない。それどころか、その色は、この数年来、むしろ鮮やかさを一段と増しているようにすら見えるのである」(247頁)深く深く訳者に首肯する。

本書は「我らが友ミハイル・バクーニンに* / (ポーランド民主委員会の私の友人たちは私の著作『ロシアの革命思想～その歴史的展開』の再刊を強く勧めてくれている。私はこの事実には極めて大きな意義があると考え。というのも、この本の公刊は革命ポーランドとロシアの革命家たちとの友好的同盟の公然たる証しとなるであろうからだ)」(9頁)という揺るがない扉書きから始まる。

*初出1853年版。当時バクーニン*はロシア政府に捕らえられ、生還する望みはないと思われていた。
(訳注)[*カール・マルクス、ジョゼフ・プルドンに強く影響を与えた無政府主義の革命家―長屋]

本書には19世紀に跋扈した私たちの知るあらゆる文化人、思想家、文学者が多彩に登場する。

ポーランドとの関係の著述は他の何にも増して濃密長大だ。33頁にこんな記述がある。

「全ての国の人びとがロシアに対して断固として立ち上がるためには、ポーランドの苛酷な戦いだけが足りなかった。ポーランドの革命の高潔な、しかし不幸な残党が、ヨーロッパ全土をさまよいながら、恐ろしい残忍な勝利者たちに関する情報を広めていた時、ロシアを呪う大きな声があらゆる所から、あらゆる言語で鳴り響いた。諸国民の怒りは正当であった…。

自分たちの弱さと無力に顔を赤らめつつ、われわれはわが国の政府がたった今われわれの手によ

って為したことを理解し、われわれの心は血の出るような苦痛に萎え、目からは苦い涙が流れ出た。

ポーランド人と顔を合わせる時など、いつでも、われわれは目を挙げる勇気を持たなかった」

長い引用になるが、この辺りのゲルツェンの文章は感情を率直直截に吐露溢させ、稀有な詩のように美しい。勿論、訳者の精緻にして柔軟優美な、量り知れない力量の訳文に依るところも大だが、全文、読み難いところが一箇所とてない。すべらかに胸におちて、その告発に啓蒙される。

闘いは続く

「ロシアの農民は多くのことに耐え、多くのことで苦しんできた。彼らの苦しみは軽減することなく今なお続いている」(244頁)

最後の章のゲルツェンのこの文章は重い。「闘いは終わっていない。闘いは続いているのだ」(229頁)

この一冊をプーチンに捧げたい。彼に精神の清らかな慰謝を促したい。この忌むしい卑劣なウクライナ戦攻という愚挙の時代の渦中にこそ、我々が真に胸に掲げたい名著中の名著そして名訳書である。

最後に訳者からの私信(便箋3枚の中の一部)を書き添える。「このところ三省さん*の詩にはまっています。とりわけ『びろう葉帽子の下で』は素晴らしく、繰り返し朗唱しています。とても気持がよくなります」

* (山尾)三省はカウンターカルチャーを生きた清貧の詩人、私の兄だ。

このような清廉な、篤実な訳者の祈りを込めた、ゲルツェンの、人間の尊厳のため、自由な言論のための実に74年ぶりの新訳である。私達は威儀を正して、本書のその今日的な存在理由を受けとめたい。

(長屋のり子、詩人、本会会員)

長縄光男さんの新訳を手にして 松田 潤

アレクサンドル・ゲルツェンという、私には朱の表紙の筑摩世界文学大系だ。菊判8ポ三段組の『過去と思索』をまず思い出す。小さな活字で組まれたが厚い二冊などもう老眼鏡に頼る今では読むのは無理だ。だいたいソ連が私の存命中になくなるなど思いもよらなかった頃だ。



ベトナム、パリ、チェコ、紅衛兵

最近長縄光男さんの新訳でゲルツェンの『ロシアの革命思想』が出された。私が長縄さんのお師匠さんの金子幸彦先生の旧訳を読んだのはもう50年以上も前になる。世界中でベトナム戦争反対、パリでは五月革命、ソ連はチェコの民主化運動への武力介入、中国は紅衛兵運動。日本は全共闘運動と重なる時代だというと、今この本を手にとって欲しい若い世代にとっては夏休みに田舎で祖父母から何度も繰り返される昔話を聞かされる気分になるのだろうか。

私がゲルツェンを読もうと思ったのは、「革命」という言葉にまだ現実味が感じられたそんな時代の雰囲気の中でだった。レーニンによる「ロシア革命」がスターリンで歪められてしまったのか、それともレーニンの革命そのものが間違っていたのか？ まずはその前に戻って考えようとしたのだった。

北大で

私が北大に入ったのは第二外国語にロシア語が昇格した年度だった。西洋哲学に学部移行をすると従来のデカンショ(デカルト、カント、ショーペンハウエルなどというのは、死語か)的なものでなく、ロシアのラヴローフをテキストに取り上げてもらった。しかも学生は私一人に教師二人だった。そんな恵まれた環境だったが、全共闘運動での石投げが忙しくなった私はさっぱり勉強もしないうちに、とうとう校舎をバリケード封鎖までしてしまった。当然ゼミは途中のままになった。

二度の流刑の後フランスに亡命したゲルツェンを気取る訳ではないが、私はバリケードが解除されて静かになったキャンパスの中で、挫折した「革命」を夢見たナロードニキ主義者のように呆然としていたと書くと、格好付けすぎだ。

ウクライナ、沖縄・広島・長崎、ガザ

そしてまた、この本を手にもまだ続くウクライナとロシアの戦争を考えると、ゲルツェンがいう小ロシア=ウクライナとポーランドの関係、フランス革命後のヨーロッパとロシア帝国、近代市民社会と遅れたままのロシア農村共同体。翻って、我が日本はといえば明治維新から、進んだ西欧に追いつこうとして大日本帝国を築くためにアジア諸国を戦渦に巻き込み、ロシア帝国との戦を朝鮮半島・満州で繰り広げ、最終的には沖縄での地上戦、広島・長崎の原爆投下で敗戦を迎えたという歴史をどう考えようか。ここにガザでのジェノサイドが加わる。ゲルツェンが悩んでいた問題は、私を悩ませる現在と通底していると、更に頭を抱えてしまうのは惚け老人の思い込みだろうか。

『革命のエチュード』『乙女の祈り』

気分を変えようとショパンの『革命のエチュード』を聴くが、祖国の独立運動を鼓舞するメロディーよりは、同じポーランドの女性作曲家バダジェフスカの『乙女の祈り』*の方が戦禍に苦しむウクライナとロシア、ガザの一般庶民には相応しいのではと思ってしまう。

*「《乙女の祈り》は世界初のミリオンヒット曲」ドクタ・ハワサ、POLE 85(2015.5)

雀が丘のゲルツェンとオガリョフの二人の語らいから松田道雄の『ロシアの革命』は始まったが、私もまた若かった頃に「革命」を語った古くからの友人とこの本、そして刊行が始まったと帯に書かれている『過去と思索』を手にも久闊を叙しながら一献傾けるのもありだろう。



(まつだ・じゅん、元札幌大学教員)

* <http://hokkaido-poland.com/POLE/POLE85Maiden'sprayer.pdf>